【論　文】

弥生時代の山陰地域における鉄器普及の様相

会下和宏
（島根大学総合博物館）

概　　要

本稿では、弥生時代の山陰地域における鉄器の普及状況を具体的に明らかにするために、時期ごとにみた鉄器出土集落遺跡の分布と出土鉄器の組成・量の様相について整理した。一方で、石器の出土状況についても整理し、鉄器の普及状況との関係について考察した。その結果、弥生後期から終末期においては、工具として袋状鉄斧・鉇・刀子などの鉄器が普及し、多くの遺跡で片刃石斧が駆逐されたことが確認できた。また、鉄鏃が普及する一方で、石鏃も併用されていた。

そのうえで、こうした弥生集落における鉄器の普及状況が、副葬品や大型区画墓造営といった弥生時代の墓制にどのような影響を与えたのかについても予察した。

キーワード：弥生時代、鉄器、山陰、集落遺跡、墓制

1　はじめに

山陰地域では、1990年代以降、弥生時代集落遺跡の発掘調査増加によって鉄器の出土例が飛躍的に増加した。本稿では、弥生時代集落遺跡から出土した鉄器の様相をもとに、その普及状況について具体的に明らかにしたい。そのうえで、集落における鉄器普及と墓制との関係について若干の考察を加えるものとする。

2　弥生時代の山陰地域における鉄器研究史

山陰地域の弥生時代鉄器について、まとまったデータに基づいて初めて検討したのは池淵俊一氏である（池淵 1998）。池淵論文1998では、1998年段階まで判明している山陰地域における弥生時代鉄器資料を集成し、その様相を時期ごとに把握した。これによれば、まず弥生中期段階の鉄器は、搬入品の伐採斧などに限定され、石器を駆逐する程の普及度ではなかったとする。続く弥生「後期前半～中葉（草田１～２期）」では、石鏃や磨石・敲石などを除いて石器がほぼ消滅することから、道具の鉄器化が完了したものと想定した。弥生「後期後半（草田３～４期）」では、鉄器の出土量が急増、器種組成において刀子・鉇が大きな比重を占め、新たに鍬・鋤先が加わる。さらに、島根県安来市柳遺跡で鍛錬鍛冶炉が検出されているほか、鳥取市西桂見遺跡鷲谷口地区・鷲谷奥地区で当該期のほとんどの住居址から多数の鉄片が出土していることから、山陰地域においても鉄器の在地生産が行われていたとみる。弥生「終末（草田５～６期）」

では、前代同様の出土量をみるが、特に鉄鏃の増加傾向が窺えるとした。また、鉄鏃の地域色として、山陰地域では無茎三角形式が弥生後期全般を通じて主体的であることを指摘した。一方、岡山平野周辺では柳葉式が圧倒的に主流を占め、広島平野周辺では無茎三角形式・柳葉式がほぼ同数を占める組成であり、山陰地域と差異があることを予察した。さらに、その後の池淵氏による再検討によれば、弥生中期では鉄斧が出土鉄器組成比の５割近くを占めるが、弥生後期前葉から中葉ではその比率が減少し、鉇が卓越することを指摘している（池淵 2005）。

山陰地域の鉄器研究に飛躍的な進展をもたらした調査成果として1990年代半ば以降から調査されている鳥取市青谷上寺地遺跡をあげることができる。当遺跡では、400点を超える多量の出土鉄器が報告されており、その鉄器の様相について、水村編2011では以下の点を指摘している。すなわち、青谷上寺地遺跡の萌芽期である弥生前期後葉から弥生中期前葉においてすでに鋳造鉄器が確認されている点、弥生後期以降に出土量が爆発的に増加する点、鉄器組成として小型斧など小型工具が卓越する一方、鏃・剣などの武器が少ない点、中国製・朝鮮半島製・九州北部製とみられる鉄斧などが一定数含まれる点、弥生中期後葉以降に遺跡内で小鍛冶が行われていた可能性がある点などである。

上記のように、主として20年程前からの調査の進展によって、山陰地域における鉄器の出土傾向が時期ごとに詳細に分析されるようになった。近年では、伯耆地域を中心に集落遺跡の発掘調査が一層進展し、鉄器出土量もさらに増加している。そこで本稿では、改めてこれまでの集落遺跡出土鉄器を集成・整理したうえで、その様相を把握したい。

３　時期別にみた鉄器の様相　―分布と器種組成―（図１・２）

ここでは、時期ごとにみた鉄器出土集落遺跡の分布と出土鉄器の組成・量の様相について整理する[(1)]。なお、ここでは明確な器種が分かるものだけを対象とし、鉄器製作の過程で残存したと考えられる板状鉄片（村上 1994・1998、高田 2004など）、棒状鉄片（山田 1983）などは除外している。対象とする鉄器出土遺跡は、石見12遺跡、出雲40遺跡、伯耆68遺跡、因幡４遺跡で、細別時期が特定できるもののみをグラフ化したのが、図３・４である。なお、集成にあたっては、川越 2000、池淵・東山 2008、高尾 2008を底本にした。以下、時期ごとに概述したい。

弥生前期後葉から弥生中期中葉（図１－１）

確実な事例としては、石見西部の島根県益田市羽場遺跡における鋳造鉄斧片の事例がある。羽場遺跡は、山陰地域の最西部に位置しており、山口県下関市綾羅木郷遺跡・同宝蔵寺遺跡などにみられる響灘沿岸における鉄器流通がいち早く石見西部沿岸部にも波及したものといえる。この他の日本海沿岸の遺跡におけるこの時期までの鉄器出土例としては、鳥取市青谷上寺地遺跡で弥生中期前葉を遡る可能性がある鋳造鉄斧片がみられるにすぎない。以上のように、山陰地域において将来的にこの時期の鉄器出土事例が現れるとしても、まだ山陰全域において普遍的に鉄器が浸透していた状況とは言い難い。

弥生中期後葉（図１－２）

この時期、大山北麓や日野川下流域など、伯耆を中心に比較的濃密な鉄器出土遺跡の分布がみられるようになる。出雲では、日本海沿岸部の遺跡だけではなく、斐伊川・神戸川上流域な

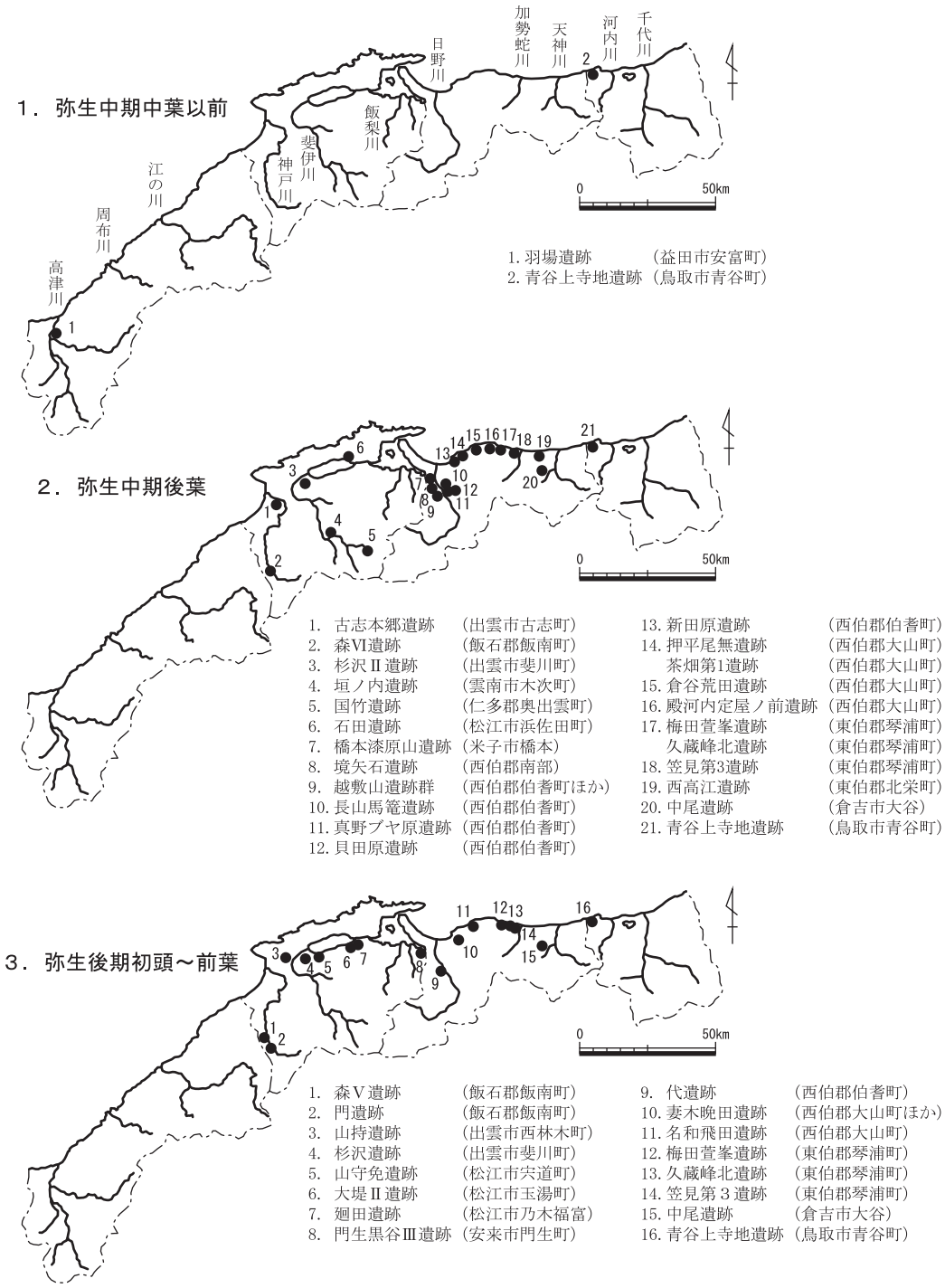
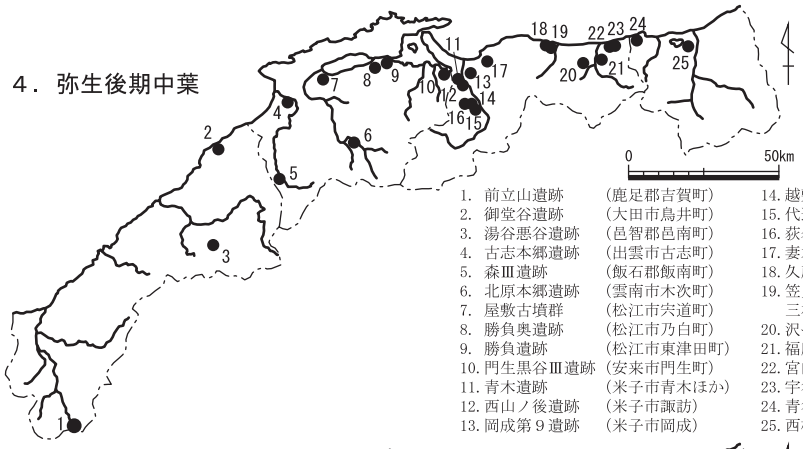
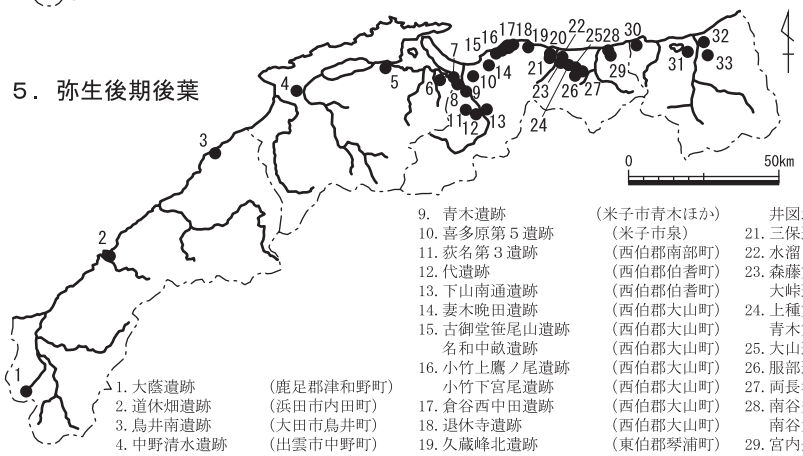


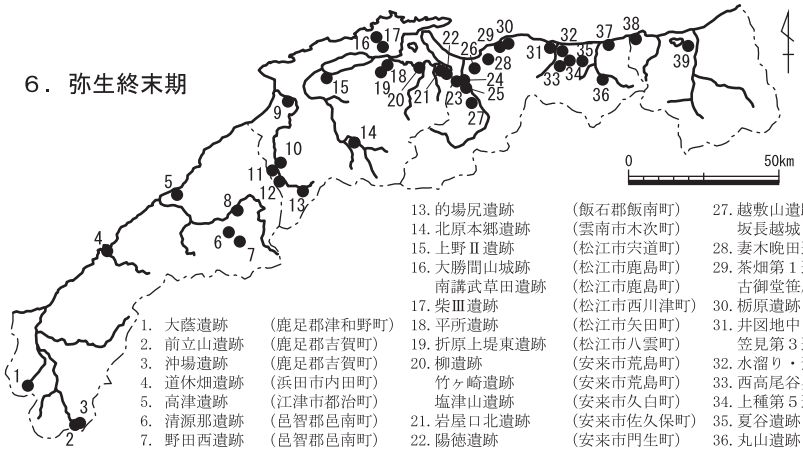
図１　山陰地域の鉄器出土集落遺跡分布図（その１、1/1,600,000）



1. 前立山遺跡 （鹿足郡吉賀町）
2. 御堂谷遺跡 （大田市鳥井町）
3. 湯谷悪谷遺跡 （邑智郡邑南町）
4. 古志本郷遺跡 （出雲市古志町）
5. 森Ⅲ遺跡 （飯石郡飯南町）
6. 北原本郷遺跡 （雲南市木次町）
7. 屋敷古墳群 （松江市宍道町）
8. 勝負奥遺跡 （松江市乃白町）
9. 勝負遺跡 （松江市東津田町）
10. 門生黒谷Ⅲ遺跡 （安来市門生町）
11. 青木遺跡 （米子市青木ほか）
12. 西山ノ後遺跡 （米子市諏訪）
13. 岡成第９遺跡 （米子市岡成）
14. 越敷山遺跡群 （西伯郡伯耆町ほか）
15. 代遺跡 （西伯郡伯耆町）
16. 荻名第３遺跡 （西伯郡南部町）
17. 妻木晩田遺跡 （西伯郡大山町）
18. 久蔵峰北遺跡 （東伯郡琴浦町）
19. 笠見第３遺跡 （東伯郡琴浦町）
三林遺跡 （東伯郡琴浦町）
20. 沢ベリ遺跡 （倉吉市不入岡）
21. 福庭遺跡 （倉吉市福庭）
22. 宮内第１遺跡 （東伯郡湯梨浜町）
23. 宇谷第１遺跡 （東伯郡湯梨浜町）
24. 青谷上寺地遺跡 （鳥取市青谷町）
25. 西桂見遺跡 （鳥取市桂見）



1. 大蔭遺跡 （鹿足郡津和野町）
2. 道休畑遺跡 （浜田市内田町）
3. 鳥井南遺跡 （大田市鳥井町）
4. 中野清水遺跡 （出雲市中野町）
5. 勝負遺跡 （松江市東津田町）
6. 叶谷遺跡 （安来市早田町）
7. 陰田第１遺跡 （米子市陰田町）
8. 吉谷屋奈ヶ埼遺跡 （米子市吉谷）
古市宮ノ谷山遺跡 （米子市吉谷）
9. 青木遺跡 （米子市青木ほか）
10. 喜多原第５遺跡 （米子市泉）
11. 荻名第３遺跡 （西伯郡南部町）
12. 代遺跡 （西伯郡伯耆町）
13. 下山南通遺跡 （西伯郡伯耆町）
14. 妻木晩田遺跡 （西伯郡大山町）
15. 古御堂笹尾山遺跡 （西伯郡大山町）
名和中畝遺跡 （西伯郡大山町）
16. 小竹上鷹ノ尾遺跡 （西伯郡大山町）
小竹下宮尾遺跡 （西伯郡大山町）
17. 倉谷西中田遺跡 （西伯郡大山町）
18. 退休寺遺跡 （西伯郡大山町）
19. 久蔵峰北遺跡 （東伯郡琴浦町）
箆津乳母ヶ谷第２遺跡 （東伯郡琴浦町）
梅田東前谷中峯遺跡 （東伯郡琴浦町）
20. 笠見第３・５遺跡 （東伯郡琴浦町）
中道東山西山遺跡 （東伯郡琴浦町）
三林遺跡 （東伯郡琴浦町）
井図地中ソネ遺跡 （東伯郡琴浦町）
21. 三保遺跡 （東伯郡琴浦町）
22. 水溜り・駕篭据場遺跡 （東伯郡琴浦町）
23. 森藤第１遺跡 （東伯郡琴浦町）
大峠遺跡 （東伯郡琴浦町）
24. 上種第５遺跡 （東伯郡北栄町）
青木第４遺跡 （東伯郡北栄町）
25. 大山遺跡 （倉吉市鋤）
26. 服部遺跡 （倉吉市服部）
27. 両長谷遺跡 （倉吉市国府）
28. 南谷夫婦塚遺跡 （東伯郡湯梨浜町）
南谷大山遺跡 （東伯郡湯梨浜町）
29. 宮内長谷遺跡 （東伯郡湯梨浜町）
30. 青谷上寺地遺跡 （鳥取市青谷町）
31. 西桂見遺跡 （鳥取市桂見）
32. 秋里遺跡 （鳥取市秋里）
33. 西大路土居遺跡 （鳥取市西大路土居）



1. 大蔭遺跡 （鹿足郡津和野町）
2. 前立山遺跡 （鹿足郡吉賀町）
3. 沖場遺跡 （鹿足郡吉賀町）
4. 道休畑遺跡 （浜田市内田町）
5. 高津遺跡 （江津市都治町）
6. 清源那遺跡 （邑智郡邑南町）
7. 野田西遺跡 （邑智郡邑南町）
8. 沖丈遺跡 （邑智郡美郷町）
9. 古志本郷遺跡 （出雲市古志町）
10. 板屋Ⅲ遺跡 （飯石郡飯南町）
11. 門遺跡 （飯石郡飯南町）
12. 森Ⅱ・Ⅵ遺跡 （飯石郡飯南町）
13. 的場尻遺跡 （飯石郡飯南町）
14. 北原本郷遺跡 （雲南市木次町）
15. 上野Ⅱ遺跡 （松江市宍道町）
16. 大勝間山城跡 （松江市鹿島町）
南講武草田遺跡 （松江市鹿島町）
17. 柴Ⅲ遺跡 （松江市西川津町）
18. 平所遺跡 （松江市矢田町）
19. 折原上堤東遺跡 （松江市八雲町）
20. 柳遺跡 （安来市荒島町）
竹ヶ崎遺跡 （安来市荒島町）
塩津山遺跡 （安来市久白町）
21. 岩屋口北遺跡 （安来市佐久保町）
22. 陽徳遺跡 （安来市門生町）
23. 吉谷中馬場山遺跡 （米子市吉谷）
24. 福市遺跡 （米子市福市）
25. 青木遺跡 （米子市青木ほか）
西山ノ後遺跡 （米子市諏訪）
26. 喜多原第５遺跡 （米子市泉）
27. 越敷山遺跡群 （西伯郡伯耆町ほか）
坂長越城ノ原遺跡 （西伯郡伯耆町）
28. 妻木晩田遺跡 （西伯郡大山町）
29. 茶畑第１遺跡 （西伯郡大山町）
古御堂笹尾山遺跡 （西伯郡大山町）
30. 栃原遺跡 （西伯郡大山町）
31. 井図地中ソネ遺跡 （東伯郡琴浦町）
笠見第３遺跡 （東伯郡琴浦町）
32. 水溜り・駕篭据場遺跡 （東伯郡琴浦町）
33. 西高尾谷奥遺跡 （東伯郡北栄町）
34. 上種第５遺跡 （東伯郡北栄町）
35. 夏谷遺跡 （倉吉市和田）
36. 丸山遺跡 （東伯郡三朝町）
37. 南谷大山遺跡 （東伯郡湯梨浜町）
南谷ヒジリ遺跡 （東伯郡湯梨浜町）
38. 青谷上寺地遺跡 （鳥取市青谷町）
39. 西桂見遺跡 （鳥取市桂見）

図２　山陰地域の鉄器出土集落遺跡分布図（その２、1/1,600,000）

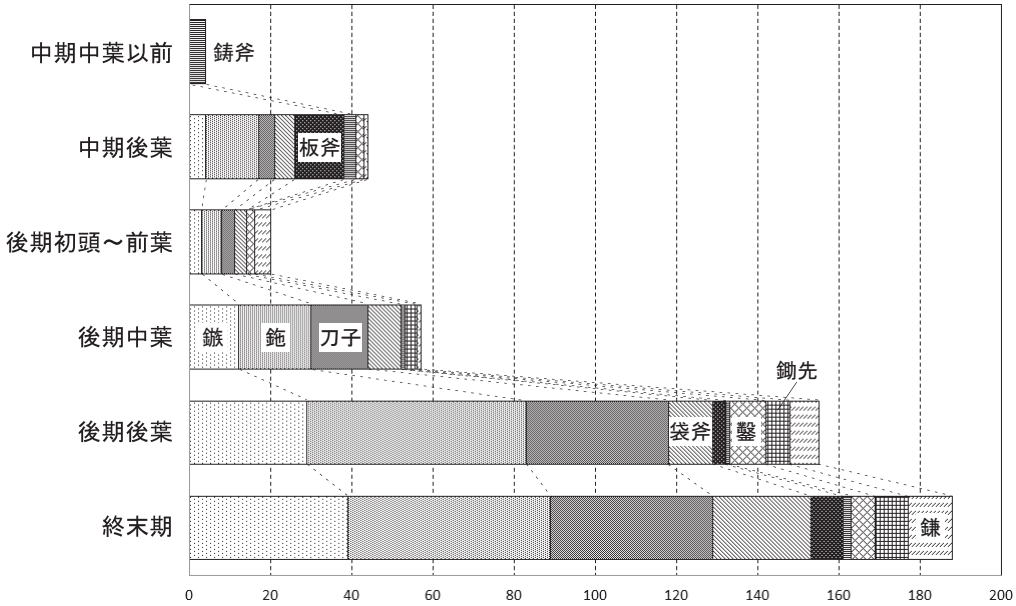


図３　山陰・弥生集落遺跡出土鉄器器種の時期別点数

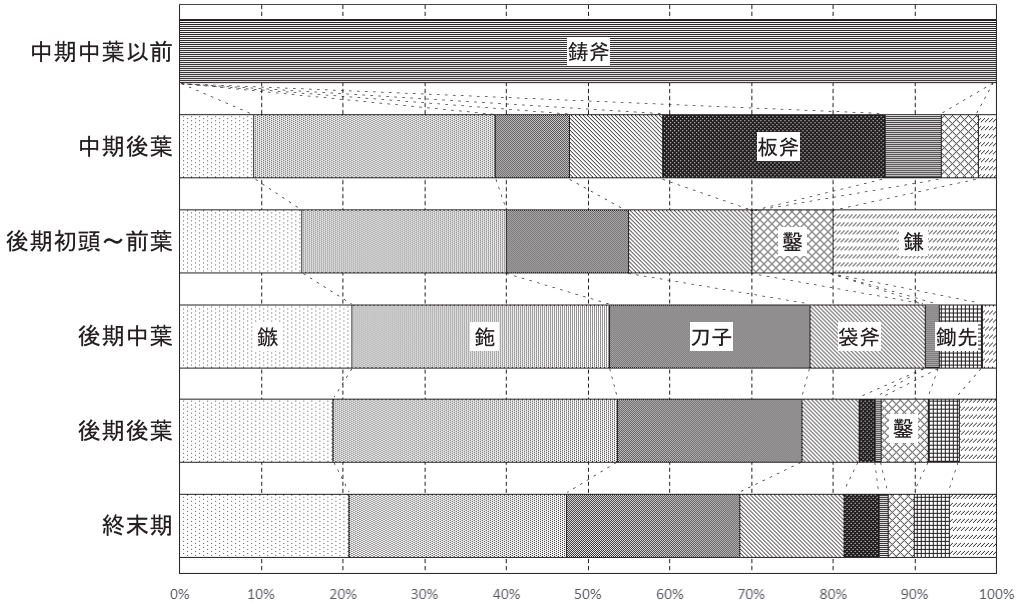


図４　山陰・弥生集落遺跡出土鉄器器種の時期別比率

図５　山陰地域・弥生時代の鉄器（その１、1/4）

板状鉄斧

１・２．国竹遺跡（島根県奥出雲町・中期後葉）
３．長山馬籠遺跡（鳥取県伯耆町・中期後葉）
４．森Ⅵ遺跡（島根県飯南町・中期後葉）
５．柳遺跡（島根県安来市・終末期）
６．板屋Ⅲ遺跡（島根県飯南町・終末期）
７．陽徳遺跡（島根県安来市・終末期？）
８．沖丈遺跡（島根県美郷町・終末期）
９．長山馬籠遺跡（鳥取県伯耆町・中期後葉）
10．杉沢Ⅱ遺跡（島根県出雲市・中期後葉）
11．越敷山遺跡（鳥取県伯耆町・後期中葉）
12．竹ヶ崎遺跡（島根県安来市・終末期）

袋状鉄斧

13. 板屋Ⅲ遺跡（島根県飯南町・終末期）
14. 沖丈遺跡（島根県美郷町・終末期？）
15. 笠見第３遺跡（鳥取県琴浦町・後期中葉）
16. 竹ヶ崎遺跡（島根県安来市・終末期）
17. 陽徳遺跡（島根県安来市・終末期？）
18. 越敷山遺跡（鳥取県伯耆町・後期中葉）
19・20. 沖丈遺跡（島根県美郷町・終末期）

鉄鎌

21. 杉沢遺跡（島根県出雲市・後期初頭）

鋤（鍬）先

22. 竹ヶ崎遺跡（島根県安来市・終末期）
23. 宮内第１遺跡（鳥取県湯梨浜町・後期）

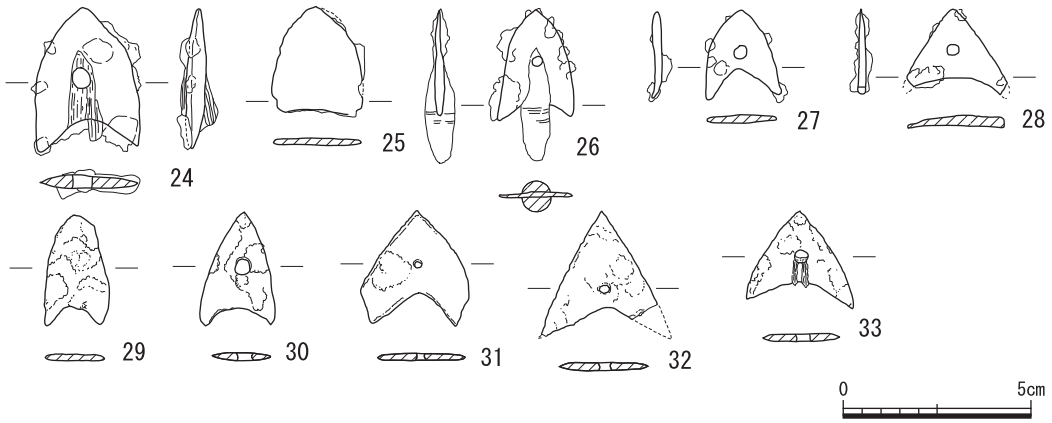


図６　山陰地域・弥生時代の鉄器（その２、1/2）

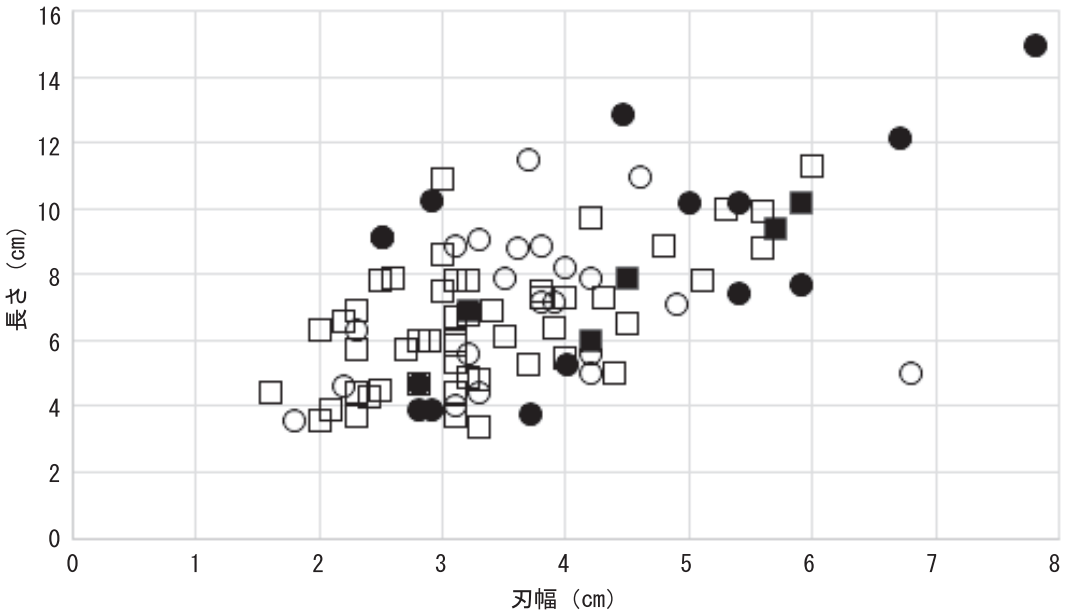
鉄鏃

24. 北原本郷遺跡（島根県雲南市・終末期）
25. 竹ヶ崎遺跡（島根県安来市・終末期）
26～28. 森Ⅱ遺跡（島根県飯南町・終末期）
29～33. 沖丈遺跡（島根県美郷町・終末期など）

ど山間部の遺跡でも鉄器出土事例が認められる。器種としては、鋳造鉄斧やその再加工品、鍛造品の板状鉄斧が多くみられる。工具では、刀子よりも鉇が多数を占め、伯耆では鑿もみられる。

島根県飯石郡飯南町森Ⅵ遺跡の刃幅5.0cm を測る板状鉄斧（図５－４）は、基部側に鉄斧とほぼ直交する木目が残存していることから直柄が装着されていたと考えられる。また残存する刃部の湾曲は、図の左右が非対称で、図の右側がより内湾していることから、縦斧すなわち伐採斧[(2)]として使用されたために摩滅したものと推定できる。この他、図５－２・３・６・９・10も刃部の一方がより内湾している。こうした事例を重視すれば、概ね刃幅5.0cm 以上を測る鉄斧は、主に伐採斧として利用されていたことが推定できよう。

この時期の鍛造鉄斧のうち、袋状鉄斧は５例、板状鉄斧は15例となり、後者の方が多数を占める（図７、池淵 2008など）。鍛造鉄斧の法量を弥生中期後葉と弥生後期・終末期とで比較すると、例えば刃幅5.0cm 以上では、弥生中期後葉が８例に対して、弥生後期から終末期が６例に留まり、前者の時期の段階ですでに後者の時期以上に大型の鉄斧が認められる（図７）。弥生中期後葉における刃幅5.0cm 以下の鉄斧事例は、ほとんどが青谷上寺地遺跡からの出土であり、池淵氏が指摘しているように、その他の遺跡の出土鉄斧は総じて大型品が多い（池淵 2012）。



■中期（袋斧）　●中期（板斧）　□後期・終末期（袋斧）　○後期・終末期（板斧）

図７　鉄斧の法量散布図

なお、大澤正己氏による島根県仁多郡奥出雲町国竹遺跡の板状鉄斧（図５－１・２）の金属学的調査によれば、これらの鉄斧刃先はいずもれも軟鋼の心金を硬鋼の皮金で挟んだ構造をもつ「合せ鍛え」製品であり、朝鮮半島産の可能性が高いとされている（大澤 2000）。長山馬籠遺跡の板状鉄斧（図５－３）・袋状鉄斧（図５－９）も一部で皮金が剥離し、心金と思われる部分が露出した状況が観察される。

弥生後期初頭から前葉（図１－３）

弥生中期後葉と比較すると、鋳造鉄斧・板状鉄斧が減少する傾向にあり、特に板状鉄斧は弥生後期後葉までほとんど認められなくなる。島根県飯石郡飯南町森Ⅵ遺跡・島根県出雲市杉沢遺跡（図５－21）・島根県松江市山守免遺跡・鳥取県西伯郡大山町名和飛田遺跡では、農具としてすでに鉄鎌がみられ、前後の時期と比べて出土量が多い。

弥生後期中葉（図２－４）

前時期の分布範囲に加えて、伯耆東部の天神川下流域や東郷池周辺、因幡の鳥取平野・千代川下流域の事例が増加する。

工具では刀子が比較的増加する。さらに、この時期頃から、板状鉄斧よりも袋状鉄斧が大半を占めるようになっていく。弥生後期から終末期における袋状鉄斧・板状鉄斧の法量をみると、おおむね刃幅2.3cm と3.0～4.2cm あたりに濃密なまとまりが認められる（図７）。このうち、おおむね刃幅2.3cm 前後以下となる小型の鉄斧は、弥生中期後葉まではみられないが弥生後期から増加する。様々な木製品の加工工程に対応して、様々な法量の鉄斧が製作され、使い分けがなされたようである。この刃幅2.3cm 以下に相当する鉄斧をみると、袋状鉄斧９例に対して

板状鉄斧３例となり、前者の方が多数を占めていることから（図７）、木器細部の加工に際しては主に袋状鉄斧が利用されたことが分かる。

また、この頃から伯耆の鳥取県西伯郡伯耆町越敷山遺跡や鳥取県西伯郡大山町妻木晩田遺跡妻木山地区などで、いわゆる鋤（鍬）先（図５－22・23など）が見られるようになる。鋤先の刃幅は、約7.1～13.0cm を測り、九州北部など他地域のものと同様である。現状において、鋤（鍬）先の出土は、大山山麓をはじめとした伯耆を中心に弥生終末期に到るまでみることができ、山陰地域内における分布の地域性を示している。また、鋤（鍬）先のような比較的大型の鉄器が出土する遺跡では、鳥取県西伯郡大山町妻木晩田遺跡・鳥取県西伯郡伯耆町越敷山遺跡群・鳥取市青谷上寺地遺跡などのように同一集落内におけるその他の出土鉄器の種類・量が比較的充実している傾向がうかがえる。

弥生後期後葉（図２－５）

再び大山北麓や日野川下流域などでの濃密な鉄器出土遺跡の分布が認められるようになる。また、石見の日本海沿岸部の遺跡でも散見される。

前時期と比較して、全体的な鉄器の出土点数が倍増し、なかでも鉄鏃・鉋・刀子の増加傾向が目立っている。ひき続き、伯耆を中心に鋤（鍬）先の出土が認められる。また、九州中部・北部に出土事例が多い、袋状鉄斧基部を外側に折り曲げて帯状に分厚くした有帯袋状鉄斧（図５－15など）が、伯耆・因幡西部を中心に多数出土する（水村 2011）。鉄鏃では、鳥取県西伯郡大山町妻木晩田遺跡において中央に孔を有する無茎式鉄鏃がまとまってみられる。なお、図３・４グラフにはカウントされていないが、鉄器製作の過程で生成、残存したと考えられる用途不明鉄片・板状鉄片・棒状鉄片などの出土点数が飛躍的に増加していることから、この時期、山陰地域における鉄器製作が活発化したことが窺える。

弥生終末期（図２－６）

山陰地域全体の日本海沿岸部および河川流域の山間部に分布がみられ、より濃密な各地域への鉄器の普及が窺える。加えて、鉄鏃・刀子・袋状鉄斧などの鉄器出土点数は、伸びが鈍化するもののひき続き増加している。また、鉄器製作の過程で生成・残存したと考えられる用途不明鉄片・板状鉄片・棒状鉄片などの出土点数も前時期同様にみられる。この時期、山陰地域における鉄器製作が定着し、安定的に行われていたことが窺えよう。

山陰地域における鉄鏃は、凹基ないし平基の無茎式が大半であるが、当該期には柳葉式や有茎三角形式など、有茎式が増加する。また、妻木晩田遺跡に加えて、島根県鹿足郡津和野町大蔭遺跡・島根県邑智郡美郷町沖丈遺跡（図６－30～33）・島根県飯石郡飯南町森Ⅱ遺跡（図６－26～28）・島根県雲南市北原本郷遺跡（図６－24）など、主に島根県山間部において中央に孔を有する無茎式鉄鏃が比較的多く分布している。

小結　以上をまとめると、まず弥生中期後葉では、主に伐採斧および、加工具や農具の一部において鉄器の導入が開始される。弥生後期前葉から中葉は、大型の伐採斧がやや減少する一方、鉋・刀子・袋状鉄斧など、木器加工具としての小型鉄器の普及が進んでいくようである。弥生後期後葉では、ひき続き鉄鏃・鉋・刀子の普及が進む。用途不明鉄片の増加から、鉄器製作の活発化も窺える。弥生終末期に至ると、鉄鏃・刀子・袋状鉄斧を始めとした各器種の出土

点数の増加から、鉄器普及がより進んでいったと考えられる。各時期の幅が厳密に一定である保証はないものの、図３をみれば弥生後期初頭・前葉から終末期にかけて鉄器の出土点数が増加し、特に後期中葉から後葉にかけて飛躍的に急増していく傾向がうかがえよう[(3)]。また、特に弥生後期中葉以降、鉄器全体に占める鉄鏃および工具の比率が高く、鋤（鍬）先・鉄鎌などの農具が少ない傾向にある[(4)]。

4　石器の出土状況からみた鉄器の普及

表１　弥生中期から終末期における遺構・遺物包含層出土の石斧点数

遺跡名	所在地	時期	両刃石斧	片刃石斧
羽場遺跡	島根県 益田市 安富町	前期中葉～中期中葉	13	3
青谷上寺地遺跡１～８区	鳥取県 鳥取市 青谷町	前期後葉～中期	26	29
殿河内定屋ノ前遺跡	鳥取県 西伯郡 大山町	中期中～後葉	4	1
茶畑山道遺跡	鳥取県 西伯郡 大山町	中期中～後葉	4	7
梅田萱峯遺跡	鳥取県 東伯郡 琴浦町	中期後葉	5	5
会下・郡家遺跡	鳥取県 鳥取市 気高町	中期後葉	2	4
杉沢・杉沢Ⅱ遺跡	島根県 出雲市 斐川町	中期後葉～後期初頭	3	1
青谷上寺地遺跡１～８区	鳥取県 鳥取市 青谷町	後期初頭～古墳初頭	19	14
西川津遺跡 海崎地区	島根県 松江市 西川津町	後期	8	0
西川津遺跡 鶴場地区	島根県 松江市 西川津町	後期～終末期	2	1
妻木晩田遺跡 妻木新山地区	鳥取県 西伯郡 大山町	後期前葉	3	0
吉谷屋奈ヶ埆遺跡	鳥取県 米子市 吉谷	後期中～後葉	1	0
妻木晩田遺跡 妻木新山地区・松尾頭地区	鳥取県 西伯郡 大山町	後期後葉	5	0
会下・郡家遺跡	鳥取県 鳥取市 気高町	後期後葉	1	0
道休畑遺跡	島根県 浜田市 内田町	後期後葉～終末期	1	0
妻木晩田遺跡 妻木新山地区	鳥取県 西伯郡 大山町	終末期	1	0
越敷山遺跡	鳥取県 西伯郡 伯耆町	終末期	1	0

（１）石斧の出土状況

道具に占める鉄器の普及状況を推測するうえで、石器から鉄器への転換の様相についても確認しておく必要がある。道具における石器から鉄器への移行の問題は、戦前から言及されてきたが、なかでも松井和幸氏は、九州・近畿・東日本各地域における石器・鉄器が伴出した集落遺跡の資料をもとにして具体的に検討を加えた（松井和 1982）。これによれば、蛤刃石斧などが残存するものの、弥生後期中頃までには、全国的にほぼ完全に斧・手斧・刀子・鉈などの工具類は鉄器化されていたとしている。この他、下條信行氏は、九州北部や畿内において加工用鉄斧の普及によって加工用の片刃石斧が減少し、伐採用の太型蛤刃石斧が残存することを指摘している（下條 1985）。川越哲志氏も、九州など西日本全般において、弥生終末期まで石斧などが残存し、「弥生人の鉄器化のエネルギーが加工用具に集中的に投入された」と評価する（川越 1993：p.274）。

以上の先行研究を踏まえ、山陰地域における石器の出土状況についてみておきたい。表１は、山陰地域の弥生中期から終末期における遺構・遺物包含層から出土した両刃石斧・片刃石斧の点数である。ただし、後世における遺構埋土への二次的混入の可能性があるため、必ずしもす

べてが石器の使用時期を示すとは限らない。表１によれば、基本的に伐採斧とみられる太型蛤刃石斧や扁平両刃石斧などの両刃石斧は、弥生終末期までの遺構・遺物包含層から出土している。一方、加工具である扁平片刃石斧・鑿状片刃石斧などは、鳥取市青谷上寺地遺跡を除いて弥生後期の事例が希少である。同一遺跡のなかで両刃石斧と片刃石斧の点数を比較すると、弥生中期後葉の集落遺跡である鳥取県東伯郡琴浦町梅田萱峯遺跡では、両刃石斧が５点に対し、扁平片刃石斧が５点（遺構出土資料のみ）、弥生中期中葉から後葉の鳥取県西伯郡大山町殿河内定屋ノ前遺跡では、両刃石斧が４点に対し、扁平片刃石斧が１点（遺構出土資料のみ）、弥生中期中葉から後葉の集落遺跡である鳥取県大山町茶畑山道遺跡では、太型蛤刃石斧が４点、扁平片刃石斧が６点、小型方柱状片刃石斧が１点（包含層出土資料）出土している。しかし、青谷上寺地遺跡を除いた弥生後期から終末期の遺跡では、両刃石斧が出土していても、片刃石斧の出土点数が僅少である[(5)]。

以上の石斧出土状況と前節でみた鉄器出土状況を総合すると、弥生後期から終末期においては、伐採斧として大型鉄斧が使用された一方で、両刃石斧も中期から継続して使用された。一方で、工具として袋状鉄斧・鉇・刀子などの鉄器が普及し、多くの遺跡で片刃石斧を駆逐したことを窺うことができる。すなわち、特に弥生後期・終末期においては、用途によって石器・鉄器の使い分けがあったようである。

（２）鉄鏃と石鏃

表２は、弥生後期から終末期の遺構から出土した石鏃の出土点数である。これによれば、黒曜石製などの凹基式・平基式石鏃が弥生後期や終末期の遺構からも一定量出土していることが分かる。もとより、後世における遺構への二次的混入を考慮すれば、遺構の所属時期が必ずしも石鏃の使用時期を示すとは限らない。古墳墳丘の盛土内や奈良時代の住居跡から石鏃が出土する事例からすれば、どの程度、遺構の時期と石鏃の使用時期とが一致するのかは、さらなる厳密な検討の余地が残されていよう。しかし一方で、住居床面からの出土事例、弥生後期・終末期のみに存続した遺跡からの出土事例があることを重視すれば、鉄鏃が弥生後期から終末期において増加した一方で、石鏃もまた、需要をカバーするために弥生後期から終末期にかけて生産され使用され続けていた可能性が想定される。ここでは、少なくとも弥生後期に入ってただちに石鏃が消滅したのではなく、徐々に鉄鏃に転換していった可能性を指摘しておきたい[(6)]。

５　鉄器の普及と墓制との関連

上記のような鉄器普及という経済的動向は、精神的営為に関わる祭祀行為に対してどのような影響を与えているだろうか。本節では、弥生墳墓の諸要素を俎上に載せて、それらと鉄器普及との関連について考察し、今後の課題を認識しておきたい。

（１）副葬品としての鉄器

上記のように山陰地域では、弥生中期後葉には集落において本格的な鉄器普及が始まるが、

表２　弥生後期から終末期における遺構出土の石鏃一覧

遺跡名	所在地	出土場所	時期	点数
古八幡付近遺跡	島根県 江津市 敬川町	環濠	中期中葉～後期前葉	2(1)
森Ⅵ遺跡	島根県 飯石郡 飯南町	竪穴住居	中期後葉～後期初頭	2(0)
倉谷荒田遺跡	鳥取県 西伯郡 大山町	竪穴住居埋土	中期後葉～古墳前期	1(0)
門生黒谷Ⅲ遺跡	島根県 安来市 門生町	竪穴住居埋土	後期前葉	5(4)
笠見第３遺跡	鳥取県 東伯郡 琴浦町	竪穴住居埋土	後期前葉	1(0)
妻木晩田遺跡 洞ノ原地区	鳥取県 米子市 淀江町	環濠埋土	後期前葉	1(1)
妻木晩田遺跡 妻木新山地区	鳥取県 西伯郡 大山町	溝・土坑・ 竪穴住居床面	後期前葉	3(0)
境矢石遺跡	鳥取県 西伯郡 南部町	段状遺構	後期前～中葉	3(2)
竹ヶ崎遺跡	島根県 安来市 荒島町	溝	後期中葉	1(0)
北原本郷遺跡	島根県 雲南市 木次町	竪穴住居埋土	後期中葉	2(0)
森Ⅲ遺跡	島根県 飯石郡 飯南町	竪穴住居	後期中葉	2(0)
妻木晩田遺跡 洞ノ原地区	鳥取県 米子市 淀江町	環濠埋土	後期中葉	1(1)
妻木晩田遺跡 妻木新山地区	鳥取県 米子市 淀江町	竪穴住居・土坑	後期中葉	4(4)
越敷山遺跡	鳥取県 西伯郡 伯耆町	竪穴住居埋土	後期中葉	1(1)
笠見第３遺跡	鳥取県 東伯郡 琴浦町	竪穴住居床面・埋土	後期中葉	2(0)
野津原Ⅱ遺跡	島根県 松江市 宍道町	竪穴住居埋土	後期後葉	2(1)
妻木晩田遺跡 洞ノ原地区	鳥取県 米子市 淀江町	環濠埋土・ 竪穴住居埋土	後期後葉	5(1) (未成品あり)
妻木晩田遺跡 松尾頭地区・ 妻木山地区・妻木新山地区	鳥取県 西伯郡 大山町	竪穴住居埋土・床面・ 溝床面・段状遺構床面	後期後葉	8(3)
越敷山遺跡	鳥取県 西伯郡 伯耆町	竪穴住居埋土	後期後葉	1(0)
豊成叶林遺跡	鳥取県 西伯郡 大山町	竪穴住居	後期後葉	1(1)
笠見第３遺跡	鳥取県 東伯郡 琴浦町	竪穴住居埋土	後期後葉	4(1)
篦津乳母ヶ谷第２遺跡	鳥取県 東伯郡 琴浦町	竪穴住居埋土	後期後葉	6(4)
梅田東前谷中峯遺跡	鳥取県 東伯郡 琴浦町	竪穴住居埋土	後期後葉	5(1)
宇谷第１遺跡	鳥取県 東伯郡 湯梨浜町	竪穴住居埋土	後期後葉	1(0)
道休畑遺跡	島根県 浜田市 内田町	竪穴住居・貯蔵穴	後期後葉～終末期	4(0)
坂長越城ノ原遺跡	鳥取県 西伯郡 伯耆町	竪穴住居埋土	後期後葉～終末期	4(4)
道休畑遺跡	島根県 浜田市 内田町	竪穴住居床面	後期	1(1)
西川津遺跡 鶴場地区	島根県 松江市 西川津町	溝埋土	後期～終末期	6(6)
道休畑遺跡	島根県 浜田市 内田町	竪穴住居・貯蔵穴	終末期	4(0)
上野Ⅱ遺跡	島根県 松江市 宍道町	竪穴住居埋土	終末期	1(0)
折原上堤東遺跡	島根県 松江市 八雲町	竪穴住居床面	終末期	1(1)
垣ノ内遺跡	島根県 雲南市 木次町	竪穴住居中央穴	終末期	1(1)
森Ⅱ・Ⅵ遺跡	島根県 飯石郡 飯南町	竪穴住居	終末期	3(1)
東船遺跡	島根県 隠岐郡 隠岐の島町	土坑	終末期	1(1)
妻木晩田遺跡 洞ノ原地区	鳥取県 米子市 淀江町	竪穴住居埋土・ 竪穴住居周堤溝埋土	終末期	3(3)
妻木晩田遺跡 松尾頭地区・ 妻木山地区・妻木新山地区・ 松尾城地区	鳥取県 西伯郡 大山町	竪穴住居埋土・床面	終末期	7(3) (未成品あり)
中道東山西山遺跡	鳥取県 東伯郡 琴浦町	竪穴住居埋土	終末期	1(0)

• 点数覧の(　)内数字は、黒曜石製石鏃のＳ点数。

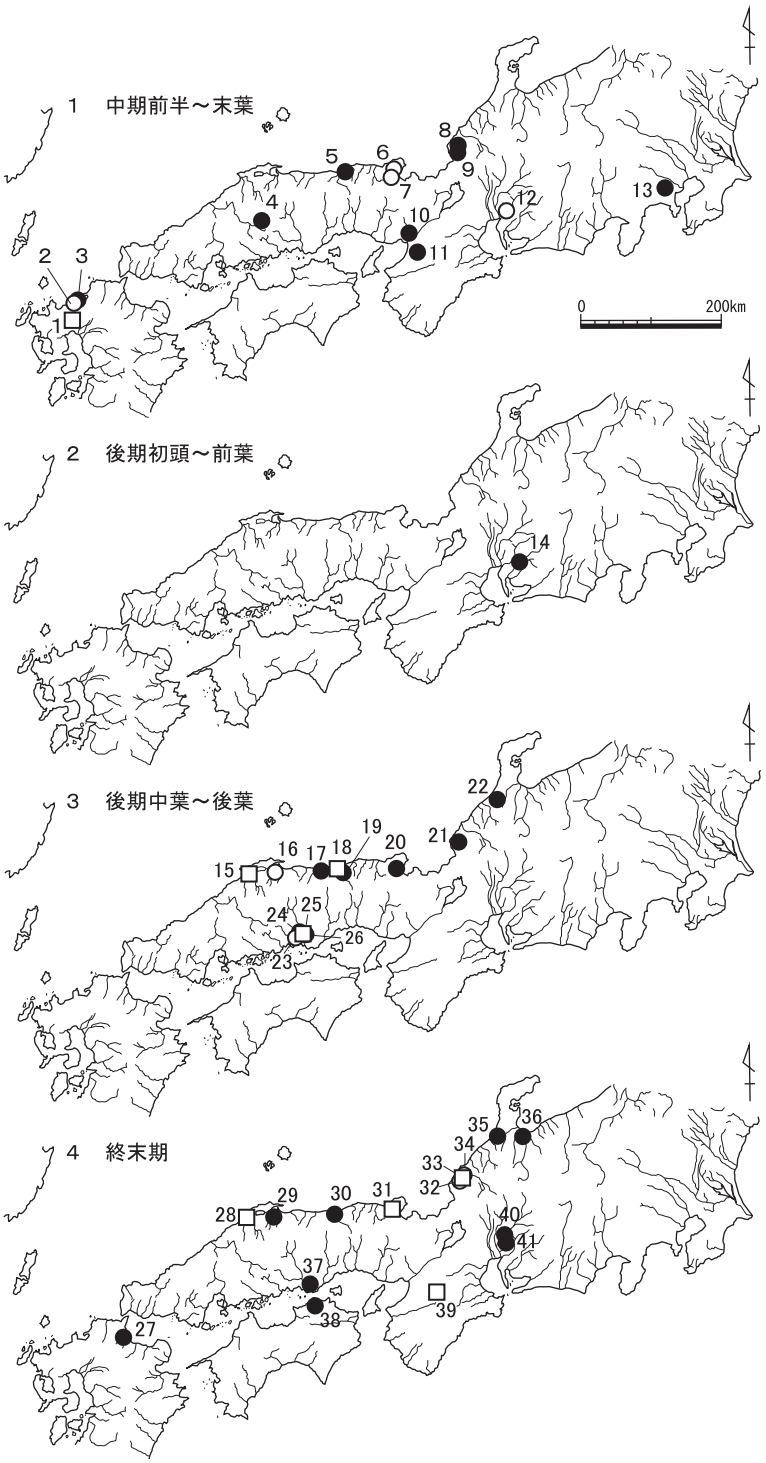
墳墓副葬品に鉄器が採用されるのは、およそ弥生後期中葉以降となる。すなわち、鉄器の流入がただちに副葬品の内容に影響を与えたわけではないことが推定される。また、弥生前期から中期後葉までは石鏃が墳墓に副葬される事例が散見されるが、弥生後期中葉以降になると管見の範囲では石鏃がみられず鉄鏃が副葬されるようになる(7)。しかし前節でみたように、集落において引き続き石鏃が使用されていたとすれば、集落で使用された道具に占める石器から鉄器への移行・転換と墳墓副葬品におけるそれとが、必ずしも同時併行的に進行したわけではない可能性が浮上しよう(8)。副葬品を選択するうえで、日常的に所持・使用されていた道具が単純に採用されたのではなく、弥生後期中葉頃以降は鉄という素材に対して認識される光沢や鋭利性・希少性といった特別な価値が重要視されたことを示唆するのではなかろうか(会下 2015：pp.139-140)。

こうした視点からすれば、弥生墳墓への銅鏃の副葬が、鉄鏃に対して比較的少ないということにも注意しておく必要がある。2015年までに行った副葬品集成(会下 1999・2015ほか)によれば、弥生時代後期から終末期に副葬された鉄鏃と銅鏃の点数は、九州北部で30：0、山陰で10：5、近畿北部で105：5、北陸で13：1、山陽で39：0となり、鉄鏃が圧倒的に大多数を占める。一方、集落遺跡出土資料をみると、鳥取市青谷上寺地遺跡では、弥生中期後葉から古墳前期初頭における鉄鏃・銅鏃の点数が、9：16となっており、銅鏃の出土比率が高い。青谷上寺地遺跡のみの断片的データであるが、少なくとも当集落では鉄鏃に対して銅鏃も一定量、使用されていたことが想定できそうである。青銅器の腐食というバイアスを前提とすることはもちろんだが、鉄製と青銅製という同じ金属製の鏃であっても、上記の鉄鏃と石鏃との関係と同様に副葬品選択の際には区別がなされていた可能性がなかったのか、今後の課題として認識しておきたい。

(2)「大型区画墓」の造営と鉄器の普及

田中義昭氏は、山陰地域における鉄器が弥生後期後半頃に増加することと四隅突出型墳丘墓の規模が急速に拡大する現象が、軌を一にしていることに注目した(田中 1999)。以前の検討(会下 2015：p.143)や本稿での集計においても、鳥取市西桂見弥生墳丘墓や島根県出雲市西谷3号墓の造営にみられるような墳丘墓が大型化する弥生後期中葉ないし後葉以降、鉄器の出土量が飛躍的に増加することが改めて追認できた。こうした現象は、被葬者ないし葬送者集団が大型の墳丘墓を造営できる程の権威・権力を伸長させていったことの源泉が、首長による鉄器をはじめとした物資流通の差配にあったことを推定させる(会下 2015：p.144)。なお、流通の掌握を権威・権力の基盤にしたという首長の性格は、山陰の弥生墳丘墓が、しばしば港の存在を想定させるような潟湖や河川を見下ろす場所に立地していることとも無関係ではなかろう(松井潔 1999)。

ところで日本列島の他地域に眼を向けると、集落遺跡の鉄器出土状況と墳丘墓との関係について、以下のような状況が概観できる。まず九州北部の集落遺跡では、すでに弥生中期中葉頃までには一定量の鉄器の出土が認められ、墳墓における鉄器副葬においても、弥生中期中葉頃から鉄剣・刀子・鉇などの副葬が開始されている(会下 2007)。1辺ないし長軸が20m以上の規模をもつ「大型区画墓」(会下 2011)としては、弥生中期前半において長軸約40～45m・



● 長辺・長軸20m前後～
○ 長辺・長軸30m前後～
□ 長辺・長軸40m前後～
（突出部は除く）

1．吉野ヶ里遺跡ＳＴ1001墳丘墓
2．三雲南小路遺跡
3．吉武樋渡遺跡
4．佐田谷３号墓
5．新井三嶋谷１号墓
6．寺岡遺跡ＳＸ56
7．日吉ヶ丘遺跡ＳＺ01
8．太田山２号墓
9．亀山２号墓
10．田能３号墓
11．加美Ｙ－１号墓
12．朝日遺跡ＳＺ208・254・301
13．折本西原３号墓
14．川原遺跡ＳＺ01・02・04
15．西谷２・３・４号墓
16．塩津山６・10号墓
17．宮内３号墓
18．西桂見墳丘墓
19．門上谷１号墓
20．大風呂南１号墓
21．小羽山26・30号墓
22．七ツ塚１号墓
23．黒宮大塚南丘墓
24．鋳物師谷２号墓
25．楯築墳丘墓
26．雲山鳥打１号墓
27．下稗田Ｈ地区１号墓
28．西谷９号墓
29．安養寺３号墓
30．桂見１号墓
31．赤坂今井墳丘墓
32．原目山１・２号墓
33．南春日山１号墓
34．乃木山墳丘墓
35．七野１号墓
36．杉谷４号墓
37．女男岩墳丘墓
38．石塚山２号墓
39．纒向石塚墳丘墓
40．廻間遺跡ＳＺ01
41．西上免遺跡ＳＺ01

※アンダーラインは青銅製・鉄製武器が出土した区画墓

図８　弥生時代の日本列島における大型区画墓

短軸30m弱の隅丸長方形を呈する佐賀県神埼郡吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡ＳＴ1001墳丘墓（図８－１）、弥生中期中葉において長辺約25.7m・短辺約16.5mの長方形プランが想定される福岡市吉武樋渡遺跡の区画墓（図８－３）、弥生中期後半において長辺約32m・短辺約31mの不整長方形を呈する福岡県糸島市三雲南小路遺跡の区画墓（図８－２）があげられる。以上のように、九州北部では、鉄器が本格的に普及し始めていく弥生中期頃において「大型区画墓」の造営がなされたことが分かる。ただし、現状の事例からみれば、弥生後期になると、こうした大形区画墓は影をひそめるかのようである。

中国山地の江の川水系上流域では、弥生中期後葉から四隅突出型墳丘墓が造営され始める。「大型区画墓」としては、弥生中期末葉から後期初頭の広島県庄原市佐田谷３号墓（図８－４）、弥生後期前半から終末期頃の広島県三次市花園１号墓がある。集落遺跡出土鉄器の事例はまだ少ないが、広島県庄原市和田原Ｄ地点遺跡で、すでに弥生中期中葉頃からみられるほか、広島県三次市高平遺跡や同油免遺跡などで弥生中期末から後期後葉にかけての鍛冶作業に関連する遺構・鉄器などが検出されており、「大型区画墓」の四隅突出型墳丘墓が造営されている時期は、鉄器の普及過程の時期であったことが推定される。なお、すでに村上恭通氏は、弥生中期後葉の中国山地西部における鉄器の受容、鍛冶技術の獲得は、この地域が日本海沿岸地域と瀬戸内西部との物資流通の結節点としての機能が強く働いた結果であるとして、四隅突出型墳丘墓の出現もこうした動向と無関係ではないという指摘を行っている（村上 2000：PP.150-151）。

吉備南部では、弥生後期後葉に直径約40mの規模を誇り二方に突出部を有した円形墓の岡山県倉敷市楯築墳丘墓（図８－25）が出現する。備前・備中の集落遺跡鉄器出土状況をみると、弥生中期中葉ないし後葉に鉄器が確実にみられるようになり、弥生後期から終末期に向かって点数が増加していく。この地域でも「大型区画墓」の造営時期が、鉄器の本格的普及時期と重なっているようである。

近畿北部では、弥生中期中葉から後葉にかけて、京都府与謝郡与謝野町日吉ヶ丘遺跡ＳＺ01方形貼石墓（図８－７）や同寺岡遺跡ＳＸ56方形周溝墓（図８－６）のような貼石方形墓の「大型区画墓」が出現し、弥生後期後葉には大風呂南１号墓（図８－20）のような台状墓の「大型区画墓」がみられるようになる。この地域における集落遺跡の鉄器出土事例はそれ程判明しているわけではないが、例えば上記の日吉ヶ丘遺跡や京都府京丹後市奈具岡遺跡では弥生中期中葉から後葉における鉄器の出土が確認されている。

近畿中部では、弥生終末期ないし古墳時代初頭頃、奈良盆地南東部の纒向遺跡周辺に纒向石塚古墳・矢塚古墳・勝山古墳・東田大塚古墳・ホケノ山古墳などの全長約80～115mを測る前方後円墳（墓）が造営される。奈良盆地では、この時期に到っても集落遺跡の鉄器事例が僅かであるが、纒向遺跡からは古墳時代前期初頭前後における羽口・鉄滓の出土も散見されており、高温操業による鉄器生産が開始されつつあったようである。また、弥生時代の摂津・河内・山城・大和における弥生終末期までの鉄器出土事例（野島 1996、禰宜田 2017）を概観すると、鋤（鍬）先のような大型鉄器の出土例は数例にすぎない。近畿中部における弥生後期・終末期の鉄器化の状況については、石器の出土状況から、「一定の鉄器化を認めつつも、その背後には常に鉄の絶対的不足」を想定する立場（山田 1988）と石器の激減からすでに「鉄の流通

システム」へ移行していったとする立場（禰宜田 1998）とに評価が分かれる。また、村上恭通氏は、古墳時代初頭に羽口や大量の鍛造剥片・鉄滓を伴う鍛冶遺構が、山陰・瀬戸内・近畿・関東に認められることから、この時期に播磨－讃岐－阿波ラインを越えて、近畿以東へも鉄器生産が急速かつ広汎に伝搬したことを認めた。しかし、「各地における鉄器の普及については、弥生時代の状況を一挙に払拭するには及ばす、格差とグラデイションが依然として認められ」、「古墳時代初頭は新たな鉄器普及プロセスの途上であっても、確立期ではない」（村上 2000：P.171）と評価する。

以上のように、各地・各時期における鉄器普及の相対的な状況をどの程度見積もるのかは、発掘調査件数の粗密や想定される鉄器の腐食というバイアスも加わって難しい課題である。いずれにしても、特に本州島西部における弥生後期ないし終末期の鉄器流通量は、古墳時代へ向かって増大していく途上の時期であったことは是認できるのではなかろうか。また、本稿では山陰地域以外の詳細なデータを示していないが、鉄器の出土点数は九州北部が最も多く、山陰・瀬戸内がこれに次ぐ西高東低の状況を示している。この点を重視するなら、きわめて概括的ではあるが、広域流通する鉄器が、大きく西から東へと日本列島各地域に普及していく途上の時期と重なるかのように「大型区画墓」、特に区画規模が30～40mに達するような区画墓の造営が認められるという一般的な現象が看取できないだろうか。そして、ここで重要視したいのは、鉄器という広域流通物資が十分に普及・充足しきった段階ではなく、普及していく途上段階に「大型区画墓」の造営がなされたということにある。

松木武彦氏は、弥生後期後葉の吉備南部に楯築墳丘墓のような大型墳丘墓が造営された背景のひとつには、「鉄の流通量が少ない後背地域のほうが、その『価格』すなわち交換対価が高くなる」と考え、「対価が高ければ、それだけたくさんの交換物を集める力が必要」であり、「鉄の価値が高いほうが、その供給の窓口に寄せる信服や依存も大きい」という状況があったと考えた（松木 2007：p280）。一方、鉄原産地である朝鮮半島南部により近い九州北部に目を向けると、弥生後期では生活必需品として実用された鉄器が大量に流通する経済構造があったと想定されており、このことは首長層の流通管理能力をむしろ低減させたとも考えられている（野島 2009）。また、弥生後期の九州北部社会は、鉄をはじめとした生産財の「極度の生産・流通体制を形成し、その体制の具現化・固定化がイデオロギー表現の道具たる中国鏡やそれによる秩序表現の必要性を失わせた」（村上 2000：pp.177）と考える仮説もある。すなわち、弥生後期の九州北部では鉄器流通量が充足していたがゆえに、逆に首長権の伸長や墳墓による地位の表現へとベクトルが向かわなかった可能性があるわけである。そして、図８のように弥生中期から古墳時代初頭にかけて「大型区画墓」、なかでも区画規模が30～40mを超えたり、内部の埋葬墓に青銅製品・鉄製品が副葬されたりするような区画墓を造営する地域が、九州北部から瀬戸内・山陰へ、さらに近畿中部へと東漸していくかのようにみえる現象は、一面では鉄器普及途上地域の東漸とも無関係ではないのかもしれない。今後は、本稿で山陰地域について行ったような時期ごとの鉄器出土状況を東日本も含めた各地域においてより具体的に明らかにしていく作業を通じ、こうした仮説を検証していく必要がある。

なお、池淵俊一氏は、島根県安来市柳遺跡に見られる専用鍛冶工房に隣接して四隅突出型墳

丘墓の塩津山６・10号墓が存在することなどから、鍛冶操業専業化の進展と首長墓の発達にみられる首長権の伸長とに一定の因果関係があることを見出そうとする（池淵 2008）。まだ資料が少なく証明が困難だが、鉄器流通だけでなく、鉄器生産の掌握という視点からの首長権伸長要因の説明も、重要な検討課題であろう。

6　まとめ

本稿では、山陰地域における集落遺跡出土の鉄器資料をもとに、改めて弥生時代の鉄器の普及過程について整理した。その様相に基づいて、弥生後期・終末期では石鏃よりも鉄鏃が副葬品として好まれて採用されている点、各地域の鉄器普及途上の段階において「大型区画墓」が造営される傾向にある点などの仮説を提示した。弥生社会の特質について考える際、鉄器の普及がもたらした精神的営為にまで及ぶ様々な変化は、考古学的に追究しうる最も重要なトピックのひとつであろう。本稿で提示した仮説は、まだ客観的な検証の余地が大きいが、今後は他地域も含めた検討を進めていくことでその不備を補っていきたい。

本稿をなすにあたり、下記の方・機関のご協力・ご教示をいただきました。記して感謝いたします。
池淵俊一・石橋紘二・稲田陽介・岩谷知広・大塚幸・長田康平・花谷浩・三原一将・飯南町教育委員会・出雲市文化財課・島根県埋蔵文化財調査センター・南部町教育委員会・伯耆町教育委員会・美郷町教育委員会

注

(1) 本稿での時期区分は、中期後葉が出雲・隠岐Ⅳ期（松本岩 1992a）・石見Ⅳ期（松本岩 1992b）・因幡・伯耆Ⅳ期（清水 1992）・妻木晩田遺跡編年１～３期（松本哲ほか 2000）、後期初頭から前葉が草田遺跡編年１期（赤澤 1992）・出雲・隠岐Ⅴ-１期・石見Ⅴ-１期・因幡・伯耆Ⅴ-１期・妻木晩田遺跡編年４・５期、後期中葉が草田遺跡編年２期・出雲・隠岐Ⅴ-２期・石見Ⅴ-２期・因幡・伯耆Ⅴ-２期・妻木晩田遺跡編年６・７期、後期後葉が草田遺跡編年３期・出雲・隠岐Ⅴ-３期・石見Ⅴ-３期・因幡・伯耆Ⅴ-３期・妻木晩田遺跡編年８・９期、終末期がおおむね畿内の庄内式使用時期で草田遺跡編年４～６期・出雲・隠岐Ⅴ-４期・石見Ⅴ-４期・因幡・伯耆Ⅵ期・妻木晩田遺跡編年10～12期に相当するものとした。各編年の型式細部にわたる厳密な併行関係については、本稿の本旨に大きな影響がない場合、考慮にいれない。

(2) 縦斧は、立木の伐採のほか、材の粗削り、薪割り等にも使用された可能性があるが、ここでは伐採の機能を代表させて「伐採斧」と呼称しておく。

(3) 池淵俊一氏による石見・出雲における各時期の鉄器出土率（鉄器出土遺構数／総遺構数）の分析においても、弥生中期後半から終末期にかけて鉄器出土率が高まっていることが示されている（池淵 2004）。

(4) 野島永氏による研究史の整理でも示されているように（野島 2014）、近年の学界では、鉄刃農具の普及に伴う農業生産力の発達によって古墳時代が成立したとする、伝統的な唯物史観に立脚した歴史叙述は後退しつつある。すでに川越哲志氏は、古墳時代の成立について、弥生後期から終末期の畿内地

域では、「生産力拡大のための農地、耕作地の開発、収穫時期の短縮には欠かせない農具に至っては鉄器化はきわめて緩慢であり、」「その生産手段の鉄器化が貧困であった畿内地方が新しい社会を成立させたものは、鉄器化という生産手段の変革とは別の事情があったのではないか」と予察している（川越 1993：p.281）。こうした研究状況のなか、巨大前方後円墳が３世紀以降の近畿中部に成立した背景についても異なる視点による説明が試みられようとしている（村上 2000、藤尾 2015：pp.210-232）。

(5) すでに、弥生中期の鳥取県西伯郡大山町茶畑山道遺跡と比較して、弥生後期を中心とする鳥取県西伯郡大山町妻木晩田遺跡において片刃石斧出土量が激減することから、弥生中期後葉を境にした片刃石斧減少と加工用鉄斧普及との関連性が指摘されている（辻 1999）。

(6) 道具の鉄器化が山陰より先行した九州北部においても、弥生終末期ないし古墳時代初頭まで石鏃が使用されていたことが指摘されている（川越 1993：p.274）。

(7) 弥生前期の島根県松江市鹿島町堀部第１遺跡、鳥取県湯梨浜町長瀬高浜遺跡、弥生中期後葉の島根県松江市浜乃木友田遺跡で石鏃の副葬がみられる。一方、弥生後期になると、弥生後期中葉の島根県江津市波来浜Ｂ区２号墓、鳥取県大山町妻木晩田遺跡仙谷３号墓、弥生後期中葉から後葉の鳥取県鳥取市服部３号墓、弥生終末期の鳥取県鳥取市桂見１号墓で鉄鏃の副葬が散見される。

(8) 九州においても弥生中期後葉までは石鏃の副葬がみられるが、後期以降は鉄鏃の副葬のみとなる。

参考文献

赤澤秀則　1992「出土遺物・時期」『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　島根県鹿島町教育委員会　pp.73-78

池淵俊一　1998「山陰における弥生時代鉄器の様相」『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14』島根県教育委員会ほか　pp.285-294

池淵俊一　2004「鉄器生産」『考古資料大観』第10巻　小学館　pp.222-236

池淵俊一　2005「山陰における古墳時代前半期鉄器の様相」『考古論集―川越哲志先生退官記念論文集―』　pp.435-454

池淵俊一　2008「出雲・石見・隠岐の鉄器」『第36回山陰考古学研究集会　山陰における弥生時代の鉄器と玉』第36回山陰考古学研究集会事務局　pp.11-32

池淵俊一　2012「島根県の弥生時代鉄器集成」『松江市歴史叢書』５　松江市教育委員会　pp.43-58

池淵俊一・東山信治　2008「島根県の鉄器出土遺跡」『第36回山陰考古学研究集会　山陰における弥生時代の鉄器と玉』第36回山陰考古学研究集会事務局　pp.60-171

会下和宏　1999「弥生墳墓の副葬品―中・四国、近畿、北陸地域を中心にして―」『田中義昭先生退官記念文集』田中義昭先生退官記念事業会　pp.27-45

会下和宏　2007「鉄器副葬からみた弥生墳墓」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター　pp.107-116

会下和宏　2011「墓域構成の変化、区画墓の展開」『弥生時代の考古学４　古墳時代への胎動』同成社　pp.191-210

会下和宏　2015『墓制の展開にみる弥生社会』同成社

大澤正己　2000「島根県国竹遺跡出土板状鉄斧の金属学的調査」『島根考古学会誌』第17集　pp.145-164

川越哲志　1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版
川越哲志編　2000『弥生時代鉄器総覧（東アジア出土鉄器地名表Ⅱ）』広島大学文学部考古学研究室
清水真一　1992「因幡・伯耆地域」『山陽・山陰地域の様式編年』木耳社　pp.355-412
下條信行　1985「伐採石斧（太型蛤刃石斧）」『弥生文化の研究』5　雄山閣　pp.43-47
高尾浩司　2008「鳥取県の鉄器出土遺跡」『第36回山陰考古学研究集会　山陰における弥生時代の鉄器と玉』第36回山陰考古学研究集会事務局　pp.172-265
高田健一　2004「妻木晩田遺跡における鉄器生産に関する覚え書き」『妻木晩田遺齢発掘圏査研究年報2003』鳥取県教育委員会　pp.56-62
田中義昭　1999「弥生時代」『新修米子市史』米子市　pp.172-274
辻　信広　1999「石器について」『茶畑山道遺跡』名和町文化財調査報告書24　名和町教育委員会　pp.127-139
禰宜田佳男　1998「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店　pp.51-102
禰宜田佳男　2017「近畿における鉄器及び鉄器化とその意義」『平成29年度瀬戸内海考古学研究会第７回公開大会予稿集』瀬戸内海考古学研究会　pp.95-123
野島　永　1996「近畿地方の弥生時代鉄器について」『京都府埋蔵文化財論集』第３集　京都府埋蔵文化財調査研究センター　pp.109-122
野島　永　2000「弥生時代の鉄流通試論」『製鉄史論文集』たたら研究会　pp.45-66
野島　永　2009「鉄器の生産と流通」『弥生時代の考古学』6　同成社　pp.43-52
野島　永　2014「研究史からみた弥生時代の鉄器文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集　pp.183-212
藤尾慎一郎　2015『弥生時代の歴史』講談社
松井和幸　1982「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐって」『考古学雑誌』68-2
松井　潔　1999「因幡・伯耆・出雲の墓制」『季刊考古学―特集　墳墓と弥生社会―』67　雄山閣　pp.54-60
松木武彦　2007『日本の歴史第１巻・列島創世記』小学館
松本岩雄　1992a「出雲・隠岐地域」『山陽・山陰地域の様式編年』木耳社　pp.413-482
松本岩雄　1992b「石見地域」『山陽・山陰地域の様式編年』木耳社　pp.483-482
松本哲・門脇豊文・岩田文章・妹尾活明　2000「土器の分類と編年」『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅳ』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集　大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会　pp.291-307
水村直人編　2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告６　金属器』鳥取県埋蔵文化財センター
水村直人　2011「いわゆる有帯袋状鉄斧の基本的理解に向けて」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告６　金属器』鳥取県埋蔵文化財センター　pp.109-119
村上恭通　1994「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究』41-3　pp.60-87
村上恭通　1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
村上恭通　2000「鉄器生産・流通と社会変革」『古墳時代像を見なおす』青木書店　pp.137-200
山田隆一　1988「近畿弥生社会における鉄器化の実態について」『網干善教先生華甲記念考古學論集』網干善教先生華甲記念会　pp.165-192

遺跡文献

【石見】大陰：宮田健一編　2010『大陰遺跡』津和野町教育委員会／**沖丈**：牧田公平ほか　2001『沖丈遺

跡』邑智町教育委員会／**沖場**：水津浩信　2000『沖場遺跡』六日市町教育委員会／**清源那**：寺脇隆彦ほか　1998『清源那遺跡』石見町文化財調査報告書第16集　石見町教育委員会／**高津**：梅木茂雄　2005『高津遺跡』都治地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ　江津市教育委員会ほか／**道休畑**：柳浦俊一ほか　2010『道休畑遺跡』一般国道９号（浜田・三隅道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１　島根県教育委員会ほか／**堂ノ上**：宮本正保　2010『堂ノ上遺跡』、東森晋編　2011『堂ノ上遺跡』一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７　島根県教育委員会／**野田西**：池淵俊一　2005「安来市越峠遺跡出土鋳造鉄斧片をめぐる諸問題―山陰の鋳造鉄斧―」『季刊文化財』第110号 pp.22-44／**羽場**：長澤和幸ほか　2012『中小路遺跡・羽場遺跡』益田市教育委員会／**古八幡付近**：東森晋ほか　2000『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓』一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３　島根県教育委員会ほか／**前立山**：内田律夫・勝部昭　1980『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会／**御堂谷**：仁木聡ほか　2019『御堂谷遺跡　諸友大師山横穴Ⅳ群１号穴』島根県教育委員会ほか

【出雲】石田：瀬古諒子　2004『松江西部２期地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う石田遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第95集　松江教育文化振興事業団ほか／**石台**：西尾克己ほか　1989『石台遺跡』国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７　島根県教育委員会ほか／**板屋Ⅲ**：角田徳幸ほか　1998『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５　島根県教育委員会ほか、原田敏照ほか　2003『板屋Ⅲ遺跡２』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書20　島根県教育委員会ほか／**岩屋口北**：丹羽野裕ほか　1997『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡（Ｆ区）』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13　島根県教育委員会ほか／**上野Ⅱ**：久保田一郎編　2001『上野Ⅱ遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10　島根県教育委員会ほか／**大堤Ⅱ**：川原和人ほか　2001『茂芳目遺跡・布志名遺跡・大堤Ⅱ遺跡・大堤Ⅰ遺跡・樅ノ木古墳群・真野谷遺跡・杉谷遺跡・室山遺跡』中国自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５　島根県教育委員会ほか／**折原上堤東**：川上昭一ほか　1994『新山村振興農林漁業対策事業に伴う折原上堤東遺跡発掘調査報告書』八雲村教育委員会／**垣ノ内**：増田浩太ほか　2003『家の後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２　島根県教育委員会ほか／**門**：内田律雄ほか　1996『門遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書３　島根県教育委員会／**門生黒谷Ⅲ**：丹羽野裕・池淵俊一　1998『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14　島根県教育委員会ほか／**北原本郷**：東山信治ほか　2003『北原本郷遺跡１』島根県教育委員会ほか／**国竹**：田中義昭・石田爲成　2000「島根県横田町国竹遺跡出土の鉄斧について」『島根考古学会誌』第17集／**越峠**：池淵俊一　2005「安来市越峠遺跡出土鋳造鉄斧片をめぐる諸問題　―山陰の鋳造鉄斧―」『季刊文化財』第110号　pp.22-44／**古志本郷**：守岡利栄ほか　2003『古志本郷遺跡Ⅵ　Ｋ区の調査』斐川放水路建設予定地内発掘調査報告書17　島根県教育委員会ほか／**廻田**：青木　博　1988『廻田遺跡・廻田古墳』松江市教育委員会／**山持**：池淵俊一　2007『山持遺跡　Ⅱ・Ⅲ区　Vol.２』国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４　島根県教育委員会／**塩津山**：増田浩太　2001『塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・柳遺跡・柳Ⅱ遺跡）・小久白墳墓群』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区13　島根県教育委員会ほか、丹羽野裕ほか　1998『塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附亀の尾古墳）』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区９　島根県教育委員会ほか／**柴Ⅲ**：昌子寛光　1997『柴Ⅲ遺跡発掘調査概要報告書』松江市文化財調査報告書第74集　松江市教育文化振興事業団ほか／**勝負**：川原和人ほか　2007『南外２号

墳・勝負遺跡』国道485号線道路改築事業（松江第五大橋道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ／**勝負奥**：瀬古諒子　2006『勝負奥遺跡』松江市文化財調査報告書第101集　松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団／**杉沢・杉沢Ⅱ**：景山このみ編　2016『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』出雲市の文化財報告31　出雲市教育委員会／**竹ヶ崎**：丹羽野裕ほか　1998『塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附亀の尾古墳）』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区９　島根県教育委員会ほか／**角森**：瀬古諒子　1994『角森遺跡発掘調査報告書』松江市教育文化振興事業団文化財調査報告書第６集　松江市教育文化振興事業団ほか／**友田**：岡崎雄二郎ほか　1983『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会／**中野清水**：内田律夫ほか　2004『大津町北遺跡・中野清水遺跡』一般国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５　島根県教育委員会ほか、久保田一郎ほか　2005『中野清水遺跡（２）』一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書６　島根県教育委員会ほか／**西川津**：内田律雄ほか　1988『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書４（海崎地区２）』島根県教育委員会ほか、原田敏照編　2013『西川津遺跡・古屋敷Ⅱ遺跡』島根県教育委員会／**野津原Ⅱ**：川原和人ほか　2000『勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２　島根県教育委員会／**原田**：勝部智明ほか　2006『原田遺跡（２）』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書８　島根県教育委員会ほか／**姫原西**：足立克己　1999『姫原西遺跡』一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告１　島根県教育委員会／**平所**：前島己基ほか　1977『平所遺跡（２）・夫敷遺跡』国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２　島根県教育委員会ほか、前島己基ほか　1976『平所遺跡（１）・大坪古墳群・才ノ峠古墳群』国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１　島根県教育委員会ほか／**広屋**：江耕史ほか　2002『屋敷古墳群・鋤崎古墳群・足頭古墳群・長廻古墳群・海部城跡・杓子観音Ⅰ古墳群・杓子観音Ⅰ遺跡』島根県教育委員会／**堀部第１**：赤澤秀則ほか　2005『堀部第１遺跡　鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査１』鹿島町教育委員会／**的場尻**：山崎順子ほか　1998『県道吉田頓原線緊急地方道路整備Ａ（改良）に伴う的場尻遺跡・社日山城跡埋蔵文化財発掘調査報告書』頓原町教育委員会／**南講武草田**：赤沢秀則　1992『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　鹿島町教育委員会／**森Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ**：山崎順子ほか　2009『森Ⅱ遺跡・森Ⅲ遺跡・森Ⅳ遺跡・森Ⅵ遺跡』島根県飯南町教育委員会／**森Ⅴ**：山崎順子ほか　2001『森Ⅴ遺跡』頓原町教育委員会ほか／**柳**：丹羽野裕ほか　1998『塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附亀の尾古墳）』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区９　島根県教育委員会ほか／**山守免**：川原和人ほか　2000『勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２　島根県教育委員会ほか／**陽徳**：丹羽野裕ほか　1995『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11　島根県教育委員会ほか

【隠岐】東船：原田敏照　2003『東船遺跡』隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書第２冊　島根県教育委員会

【伯耆】青木：船越元四郎ほか　1976『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』青木遺跡発掘調査団、船越元四郎ほか　1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青木遺跡発掘調査団／**青木第４**：原田雅彦ほか　1980『青木第４遺跡発掘調査報告』大栄町文化財調査報告書，第16集　大栄町教育委員会／**井図地頭**：君嶋俊行ほか　2003『井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』鳥取県教育文化財団調査報告書80　鳥取県教育文化財団／**陰田**：杉谷愛像編　1984

『陰田』米子市教育委員会／**宇代寺中**：西川徹編　1996『鶴田荒神ノ峯遺跡・鶴田堤ヶ谷遺跡・宇代横平遺跡・宇代寺中遺跡』鳥取県教育文化財団／**宇谷第１**：米田規人編　1992『宇谷第１遺跡・南谷大ナル遺跡』鳥取県教育文化財団／**梅田萱峯１区**：高尾浩司ほか　2007『梅田萱峯遺跡Ⅰ　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書11　鳥取県埋蔵文化財センター、湯村功ほか　2007『梅田萱峯遺跡Ⅱ　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書16　鳥取県埋蔵文化財センター／**梅田萱峯４区**：牧本哲雄ほか　2008『梅田萱峯遺跡Ⅳ　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅡ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書22　鳥取県埋蔵文化財センター／**梅田萱峯６区**：牧本哲雄ほか　2009『梅田萱峯遺跡Ⅴ　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅣ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書28　鳥取県埋蔵文化財センター／**梅田東前谷中峯**：小口英一郎ほか　2008『南原千軒遺跡Ⅲ・梅田東前谷中峯遺跡・梅田六ツ塚遺跡　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅢ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書23　鳥取県埋蔵文化財センター／**遠藤谷峯**：遠藤谷峯ほか　1972『倉吉市大谷字遠藤谷峯遺跡発掘調査報告』倉吉市教育委員会／**大峰**：大賀靖浩　1985『大峰遺跡発掘調査報告書』東伯町文化財発掘調査報告書第14集　東伯町教育委員会／**大山**：森下哲哉ほか　1988『立縫遺跡群Ⅲ　大山遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第47集　倉吉市教育委員会／**岡成第９**：米子市教育文化事業団　1993『岡成第９遺跡』米子市教育文化事業団文化財調査報告書１　米子市教育文化事業団／**荻名第３**：家塚英詞ほか　2000『越敷山遺跡群　荻名第３遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書63　鳥取県教育文化財団／**荻名第５**：吾郷信一　1999『荻名第５遺跡発掘調査報告書』会見町埋蔵文化財調査報告書第34集　会見町教育委員会／**押平尾無**：古御堂新林：西川徹ほか　2004『茶畑第１遺跡・押平尾無遺跡・古御堂笹尾山遺跡・古御堂新林遺跡　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』鳥取県教育文化財団調査報告書93　鳥取県教育文化財団／**尾高浅山**：杉谷愛象　1996『米子市内遺跡発掘調査報告書』米子市教育委員会／**尾田中峰**：岡平拓也ほか　2014『尾田中峰遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第143集　倉吉市教育委員会／**貝田原**：高口勝人ほか　1984『久古第３遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育文化財団報告書15　鳥取県教育文化財団／**笠見第３**：牧本哲雄編　2004『笠見第３遺跡』鳥取県教育文化財団、湯村功ほか　2007『笠見第３遺跡Ⅱ　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書14　鳥取県埋蔵文化財センター／**上福万**：北浦弘人ほか　1986『上福万遺跡Ⅱ』鳥取県教育文化財団報告書22　鳥取県教育文化財団／**上種第５**：馬淵義則ほか　1985『上種第５遺跡発掘調査報告』大栄町文化財調査報告書第14集　大栄町教育委員会／**喜多原第５**：笹尾千恵子　2007『喜多原第５遺跡』米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書56　米子市教育文化事業団／**久蔵峰北**：小山浩和ほか　2004『久蔵峰北遺跡・蝮谷遺跡・岩本遺跡　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』鳥取県教育文化財団調査報告書89、鳥取県教育文化財団／**倉谷荒田**：牧本哲雄ほか　2011『倉谷荒田遺跡・松河原上奥田第３遺跡　一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅧ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書34　鳥取県埋蔵文化財センター／**倉谷西中田**：門脇隆志ほか　2011『倉谷西中田遺跡　一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書36　鳥取県埋蔵文化財センター／**越敷山**：中原斉編　1992『越敷山遺跡群』会見町教育委員会・岸本町教育委員会／**小竹上鷹ノ尾**：濵隆造ほか　2011『小竹上鷹ノ尾遺跡　一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書42』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書21　鳥取県埋蔵文化財センター／**小竹下宮尾**：牧本哲雄ほか　2010

『小竹下宮尾遺跡・西坪岩屋谷遺跡　一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅥ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書29　鳥取県埋蔵文化財センター／**境矢石**：高橋浩樹ほか　2015『境矢石遺跡』一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書６　米子市文化財団埋蔵文化財調査室／**沢ベリ**：竹宮亜也子ほか　1996『不入岡遺跡群発掘調査報告書』倉吉市教育委員会／**坂長越城ノ原**：佐伯純也　2017『坂長越城ノ原遺跡・越敷山古墳群（坂長地区）』米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書12　米子市文化財団埋蔵文化財調査室／**三林**：家塚英詞ほか　2004『三林遺跡・井図地頭遺跡　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』鳥取県教育文化財団調査報告書88、鳥取県教育文化財団／**下山南通**：中原斉・松本琢己　1986『下山南通遺跡』鳥取県教育文化財団／**代**：長田康平　1993『代遺跡』溝口町埋蔵文化財調査報告書第10集　溝口町教育委員会／**退休寺**：西尾秀道　1997『退休寺遺跡』中山町文化財調査報告書第10集　中山町教育委員会／**茶畑第１**：西川徹ほか　2004『茶畑第１遺跡・押平尾無遺跡・古御堂笹尾山遺跡・古御堂新林遺跡　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』鳥取県教育文化財団調査報告書93　鳥取県教育文化財団／**茶畑山道**：辻信広　1999『茶畑山道遺跡』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集　名和町教育委員会、辻信広　2003『押平弘法堂遺跡・押平天王屋敷遺跡・茶畑山道遺跡』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第31集／**円谷城**：岡本智則　1997『円谷城跡発掘調査報告書　平成８年度』倉吉市文化財調査報告書第91集　倉吉市教育委員会／**栃原**：富長源十郎　1997『栃原遺跡発掘調査報告書』名和町文化財調査報告書第18集　名和町教育委員会／**殿河内定屋ノ前**：牧本哲雄ほか　2012『殿河内定屋ノ前遺跡　一般国道９号（中山名和道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書45　鳥取県埋蔵文化財センター／**豊成叶林**：濱隆造ほか　2013『倉田西中田遺跡Ⅱ・倉田荒田遺跡Ⅱ・豊成叶林遺跡・豊成上神原遺跡Ⅱ　一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅢ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書51　鳥取県埋蔵文化財センター／**中尾**：根鈴智津子ほか　1992『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第69集　倉吉市教育委員会、勢村茉莉子ほか　2017『中尾遺跡第２次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第150集　倉吉市教育委員会／**長瀬高浜**：西村彰滋ほか　1982『長瀬高浜遺跡Ⅳ』鳥取県教育文化財団調査報告書11　鳥取県教育文化財団／**長谷**：森下哲哉ほか　1994『長谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第76集　倉吉市教育委員会／**中道東山西山**：高尾浩司ほか　2005『中道東山西山遺跡　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅢ』鳥取県教育文化財団調査報告書101　鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター／**長山馬籠**：中原斉ほか　1989『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会／**夏谷**：森下哲哉ほか編　1996『夏谷遺跡発掘調査報告』倉吉市文化財調査報告書第84集　倉吉市教育委員会／**名和飛田**：北浩明ほか　2005『名和飛田遺跡　一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ』鳥取県教育文化財団調査報告書104　鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター／**名和中畝**：加藤裕一ほか　2005『名和中畝遺跡　一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ』鳥取県教育文化財団調査報告書103　鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター／**西高江**：馬淵義則　1981『東高江・西高江遺跡発掘調査報告』大栄町文化財調査報告書，第24集　大栄町教育委員会／**西高尾谷奥**：池田武ほか　2000『西高尾遺跡群発掘調査報告書　西高尾遺跡・上法万第３遺跡』大栄町埋蔵文化財発掘調査報告書第37集大栄町教育委員会／**西山ノ後**：船越元四郎ほか　1982『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』米子市教育委員会、佐柏純也編　2006『諏訪西山ノ後遺跡』米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書49　米子市教育文化事業団／**福市**：大村雅夫ほか　1969『福市遺跡の研究』山陰考古学研究所／**古市宮ノ谷山**：中森祥編　2002『古市遺跡群３　古市宮ノ谷山遺跡・古市古墳群　一般国道180号線道路改良事業に係る埋

蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育文化財団調査報告書78　鳥取県教育文化財団／**古御堂笹尾山**：西川徹ほか　2004『茶畑第１遺跡・押平尾無遺跡・古御堂笹尾山遺跡・古御堂新林遺跡　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』鳥取県教育文化財団調査報告書93　鳥取県教育文化財団／**服部**：置田雅昭ほか　1974『倉吉市服部遺跡発掘調査報告』倉吉市教育委員会／**別所中峯**：鍋倉和行ほか　2004『松谷中峰遺跡・別所中峯遺跡　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』鳥取県教育文化財団調査報告書91　鳥取県教育文化財団／**箆津乳母ヶ谷第２**：大川泰広ほか　2007『箆津乳母ヶ谷第２遺跡１　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅥ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書12　鳥取県埋蔵文化財センター、小口英一郎ほか　2007『箆津乳母ヶ谷第２遺跡Ⅱ　一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅣ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書15　鳥取県埋蔵文化財センター／**南谷大山**：米田規人編　1993『南谷大山遺跡・南谷ヒジリ遺跡・南谷22・24～18号墳』鳥取県教育文化財団、牧本哲雄編　1994『南谷大山遺跡Ⅱ・南谷29号墳』鳥取県教育文化財団／**南谷ヒジリ・南谷夫婦塚**：米田規人編　1991『南谷ヒジリ遺跡・南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳・乳母ヶ谷第２遺跡・宇野３～９号墳』鳥取県教育文化財団調査報告書26　鳥取県教育文化財団／**松尾頭**：杉田愛象　1979『松尾頭遺跡Ⅱ』大山町埋蔵文化財調査報告書第６集　大山町教育委員会／**丸山**：伊達宗泰編　1984『丸山遺跡発掘調査報告書』三朝町教育委員会・花園大学考古学研究室／**真野ブヤ原**：角田寛幸　2002『真野ブヤ原遺跡発掘調査報告書』岸本町文化財調査報告書第27集　岸本町教育委員会／**水溜り・駕篭据場**：大賀靖浩　1988『水溜り・駕篭据場遺跡・森第３遺跡発掘調査報告書』東伯町文化財調査報告書第13集　東伯町教育委員会／**宮内第１・５**：原田雅弘ほか　1996『宮内第１遺跡・宮内第４遺跡・宮内第５遺跡・宮内２・63～65号墳』鳥取県教育文化財団調査報告書48　鳥取県教育文化財団／**宮内長谷**：遠藤秀光ほか　1997『宮内長谷遺跡発掘調査報告書』東郷町文化財報告書第14集　東郷町教育委員会／**妻木晩田仙谷３号墓**：松本哲編　2000『妻木晩田遺跡群発掘調査報告書Ⅲ　大山スイス村リゾート開発事業に伴う発掘調査報告Ⅲ』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集　大山町教育委員会ほか／**妻木晩田洞ノ原地区**：岩田文章ほか　2000『妻木晩田遺跡　洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書第50集　淀江町教育委員会、濵田竜彦　2003『史跡妻木晩田遺跡第４次発掘調査報告書　洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第１集　鳥取県教育委員会／**妻木晩田松尾頭地区・妻木山地区・妻木新山地区・松尾城地区**：松本哲編　2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告　大山スイス村リゾート開発事業に伴う発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集　大山町教育委員会ほか、馬路晃祥　2006『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書　第８・11・13次調査』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第２集　鳥取県教育委員会、君嶋俊行　2008『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書　第16・19次発掘調査』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第３集　鳥取県教育委員会、玉木秀幸ほか　2011『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書　第20・21・23次発掘調査』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第４集　鳥取県教育委員会／**吉谷中馬場山・吉谷屋奈ヶ埆**：濱隆造編　2003『吉谷遺跡群　吉谷中馬場山遺跡・吉谷屋奈ヶ埆遺跡　一般国道180号線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』鳥取県教育文化財団調査報告書84　鳥取県教育文化財団／**両長谷**：岡本智則ほか　1997『両長谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第89集　倉吉市教育委員会

【因幡】青谷上寺地：北浦弘人ほか　2001『青谷上寺地遺跡３　一般国道９号改築工事（青谷・羽合道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７』鳥取県教育文化財団調査報告書72　鳥取県教育文化財団、湯村功ほか　2001『青谷上寺地遺跡４　一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書２』鳥取県教育文化財団調査報告書74　鳥取県教育文化財団、加藤裕一　2004『青谷上寺

地遺跡７　Ａ・Ｃ調査区発掘調査概要報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告７　鳥取県埋蔵文化財センター、水村直人編　2011『金属器　青谷上寺地遺跡出土品調査報告６』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告39　鳥取県埋蔵文化財センター、茶谷満ほか　2012『青谷上寺地遺跡12　第11・12次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告46　鳥取県埋蔵文化財センター／**秋里**：原田雅弘ほか　1990『秋里遺跡（西皆竹）』鳥取県教育文化財団報告書25　鳥取県教育文化財団／**会下・郡家**：原田雅弘ほか　2018『会下・郡家遺跡　一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書35』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書65　鳥取県埋蔵文化財センター／**桂見**：平川誠　1984『桂見墳墓群』鳥取市文化財報告書18　鳥取市教育委員会／**西桂見**：牧本哲雄編　1996『西桂見遺跡・倉見古墳群』鳥取県教育文化財団／**服部３号墓**：谷口恭子編　2001『服部墳墓群』鳥取市文化財団

【肥前】吉野ヶ里：七田忠昭　1997『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第132集　佐賀県教育委員会

【筑前】三雲南小路：岡部裕俊ほか　2002『三雲・井原遺跡Ⅱ　南小路地区編』前原市文化財調査報告書第78集　前原市教育委員会／**吉武樋渡**：力武卓治ほか　1996『吉武遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集　福岡市教育委員会

【備後】高平：広島県教育委員会　1979「高平遺跡発掘調査報告」『広島県文化財調査報告書９』／**佐田谷３号墓**：妹尾周三　1987『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集　広島県埋蔵文化財調査センター、今西隆行ほか　2017『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告　調査編（２）』庄原市発掘調査報告書29　庄原市教育委員会／**花園**：中村芳昭ほか　1980『史跡花園遺跡　第２次調査と整備』三次市教育委員会／**油免**：渡邊昭人編　2003『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４　油免遺跡の発掘調査』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第202集　広島県埋蔵文化財調査センター／**和田原Ｄ地点**：松井和幸ほか　1998『和田原Ｄ地点遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第186集　広島県埋蔵文化財調査センター

【備中】楯築：近藤義郎編　1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会

【丹後】大風呂南：白数真也ほか　2000『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告書第15集　岩滝町教育委員会／**寺岡ＳＸ56**：奥村清一郎編　1988『寺岡遺跡』京都府野田川町文化財調査報告第２集　京都府野田川町教育委員会／**奈具岡**：野島永・河野一隆　1997「奈具岡遺跡（第７・８次）」『京都府遺跡調査概報』第76冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター　pp.30-82／**日吉ヶ丘**：加藤晴彦編　2005『日吉ヶ丘遺跡』加悦町文化財調査報告第33集　加悦町教育委員会

【大和】纒向：橋本輝彦　1995「纒向遺跡第80次発掘調査報告」『平成６年度国庫補助事業による発掘調査報告書』桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書第16集　桜井市教育委員会　pp.64-97、橋本輝彦　1997「纒向遺跡第90次発掘調査概要報告」『平成８年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集　桜井市教育委員会　pp.9-17、青木香津江　1998「纒向遺跡第102次（纒向勝山古墳第１次）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1997年度（第２分冊）』奈良県立橿原考古学研究所／**纒向古墳群**：橋本輝彦　2006「纒向古墳群の調査成果と出土土器」『東田大塚古墳』桜井市文化財協会　pp.157-181ほか

図５・６出典（一部改変・再実測などのうえ，再トレース）

図５－１・２　田中義昭・石田爲成　2000「島根県横田町国竹遺跡出土の鉄斧について」『島根考古学会誌』第17集　図３－No.38・39／**図５－３・９**　中原斉ほか　1989『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会

図200－600・599／**図５－４・図６－26・27・28**　山崎順子ほか　2009『森Ⅱ遺跡・森Ⅲ遺跡・森Ⅳ遺跡・森Ⅵ遺跡』島根県飯南町教育委員　図７－16、図４－８・９・10／**図５－５・12・16・22・図６－25**　丹羽野裕ほか　1998『塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附亀の尾古墳）』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区９　島根県教育委員会ほか　図309－２、図86－221、図81－221、図75－197・199／**図５－６**　角田徳幸ほか　1998『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５　島根県教育委員会ほか　図212－18／**図５－７・17**　丹羽野裕ほか　1995『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11　島根県教育委員会ほか　図10－２・１／**図５－８・14・19・20・図６－29・30・31・32・33**　牧田公平ほか　2001『沖丈遺跡』邑智町教育委員会　図95－１・２・４・５・６・10・７・８・９／**図５－10・21**　景山このみ編　2016『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』出雲市の文化財報告31　出雲市教育委員会　図152－４、図32－５／**図５－11**　中原斉編　1992『越敷山遺跡群』会見町教育委員会・岸本町教育委員会　図324－839／**図５－13**　原田敏照ほか　2003『板屋Ⅲ遺跡２』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書20　島根県教育委員会ほか　図77－２／**図５－15**　牧本哲雄編　2004『笠見第３遺跡』鳥取県教育文化財団　図78－F1／**図５－18**　中原斉編　1992『越敷山遺跡群』会見町教育委員会・岸本町教育委員会　図98－209／**図５－23**　原田雅弘ほか　1996『宮内第１遺跡・宮内第４遺跡・宮内第５遺跡・宮内２・63～65号墳』鳥取県教育文化財団調査報告書48　鳥取県教育文化財団　図47－F3／**図６－24**　東山信治ほか　2003『北原本郷遺跡１』島根県教育委員会ほか　図51－423